

## 日本スポーツビジョン協会 第5回研究大会を開催 多数の研究発表



第5回研究大会風景と、講演する魚里理事長



(一社)日本スポーツビジョン協会(JSVA、魚里博理事長)は、第5回日本スポーツビジョン協会研究大会(吉澤達也大会会長=神奈川大学人間科学部教授)を6月25日、横浜市神奈川区の神奈川大学横浜キャンパスで開催した。大会テーマは「アスリートのものだけではない!ビジョントレーニングをもっと知ろう」。2019年以來4年ぶり2回目となった同大学での研究大会は、基調講演や教育講演をはじめ、多数の研究発表や実践発表があり、スポーツビジョンとその分野に関連する最新の研究成果や情報を提供した。

基調講演では、魚里理事長が「スポーツに必要なビジョンケアスペシャリスト30sとその連携」で講演。米国での30s(オフサルモロジスト、オプトメトリスト、オプティシャン)を例にとりながら、日本では眼科医、視能訓練士、眼鏡士(眼鏡作製技能士)がビジョンスペシャリストとして同様の

役割を担っているとして、それぞれの資格の現況や活動状況を解説。特に新たに導入された国家検定資格の眼鏡作製技能士についても紹介した。30sの連携は、ビジョンケア一般はもちろんのこと、スポーツにおける視覚機能に果たす役割も非常に大きいとして、「スポーツビジョンも含め、国民に最適な視覚を提供するのに連携は不可欠だ」とした。

教育講演では、田中繁JSVA顧問(研究促進担当)が「臨界期可塑性とゴールデンエイジ」で講演。スキヤモンの成長曲線を根拠に、神経系が発達する6歳から12歳ごろをゴールデンエイジと呼び、運動能力を高めるためにこの時期にトレーニングをすることが推奨されているが、神経科学では脳神経回路の形成や成熟にシナプス可塑性が関与していることが知られ、その臨界期こそが重要だと指摘。「いわゆるゴールデンエイジは一種の信仰に近い。視覚野の臨界期はゴールデンエイジの前には終了しており、脳領域によっても臨界期は異なる。早期の無理なトレーニングはリスクもあり、個々人の成長に見合ったトレーニングが必要となる」とした。

研究発表と実践発表では、野球やアーチェリーにおけるビジョントレーニングや、アイフレイルと転倒の関係、高齢者のためのビジョントレーニングなどの発表があった。ランチョンセミナーでは「魔球の正体」として元中日ドラゴンズ投手コーチの小林誠二氏、元東北楽天ゴールデンイーグルス投

手コーチの紀藤真琴氏を講師に、ピッチャーの投げるボールについてスポーツビジョン的考察を加え解説した。またブルーライトカットレンズをテーマにした研究講演(東海大学・室谷裕志教授)、スポーツビジョン測定値の標準化(田中繁顧問)の考察もあった。

会場では、スポーツビジョン能力測定体験会や野球の新ビジョントレーニング体験など、実際のトレーニングや測定を体験できる場を設けた。またロビーではニコン・エシロール、山本光学がブースを構え、スポーツビジョンに適した商品を紹介した。

### 医機連

## 新会長に山本章雄氏

(一社)日本医療機器産業連合会(医機連)は6月13日、東京・大手町のKKR



(山本新会長)

ホテル東京で総会を開催、役員改選があり、新会長に富士フィルムヘルスケア(株)の山本章雄氏が就任した。総会后、記者会見した。

山本会長は、「医機連は20の会員団体で構成されており、医療材料や衛生材料、家庭で利用するコンタクトレンズや補聴器、大型の診断機器から粒子線装置など超大型の治療機器、さらに体外診断薬などを扱っている。多種多様な医療機器・医療技術のイノベーションと安定供給を通じ、国民福祉の向上、医療機器産業の発展に寄与したい」と所信表明した。